

歌舞伎としての乱歩

——小説『人間豹』から歌舞伎『江戸宵闇妖鉤爪』へ——

松 本 和 也

1

二〇〇八年十一月、国立劇場の歌舞伎公演では『江戸宵闇妖鉤爪』明智小五郎と人間豹——が上演された。はやくから「乱歩が歌舞伎になる」というキャッチ・コピーで宣伝されていたとおり、江戸川乱歩の長篇小説『人間豹』を歌舞伎化した新作である。二幕十一場から構成される同作は、岩豪友樹子の脚色、九代目琴松（幸四郎）演出により、恩田乱学と神谷芳之助の二役に市川染五郎が、明智小五郎には松本幸四郎が配された。

映画、テレビでは多くとりあげられてきた江戸川乱歩だが、すぐに浮かぶ舞台化作品といえは三島由紀夫が戯曲化した『黒蜥蜴』があるくらいで、歌舞伎化はもちろん今回

が初めてである。「元来、小説（戯作）と演劇（歌舞伎）は独自の世界で、領域侵犯は行われなかつた」（横山泰子『江戸歌舞伎の改段と化け物』講談社、二〇〇八）という伝統を想起すればなおのこと、このたびの『江戸宵闇妖鉤爪』がいかに画期的な企画・作品であるかがうかがえる。乱歩作品の歌舞伎化企画を長年あたためてきた市川染五郎は、松本幸四郎・市川染五郎・岩豪友樹子・大和田文雄（司会）「乱歩が歌舞伎になる」（第260回——平成二十年十一月歌舞伎公演 国立劇場〈江戸宵闇妖鉤爪〉公演パンフレット）『日本芸術文化振興会、二〇〇八）で、次のように歌舞伎としての乱歩の魅力を語っている。

染五郎 僕にとつての乱歩のイメージは、非常にモダンな、インテリな感じ。でも得体の知れないものが出

て来るといふ、不思議な矛盾がある世界に惹かれたといふことがひとつあります。また、歌舞伎になる題材を探している時に乱歩と思つたのは、様式的な美しさが乱歩作品のカラーなのではないかと感じたためです。それから、理由は分からないけれども世間を騒がせる男とか、何かそういう飛んで人間が出てくる。明智小五郎という正義の味方が出て来たり美女が出て来たりしても、その人物の本質はあまり描かれていない。

しかし、善悪などの役柄としてははつきりしている、そういう設定の仕方から、非常に歌舞伎になり得る題材が多いのではないかと思つたんです。(引用部への傍線は引用者、傍点原文、以下同)

右の発言を読めば、染五郎にとつて「乱歩を歌舞伎にする」ことが思いつきでないのはもちろんとして、単に小説としての魅力によるものでもないことは明らかである。傍線を付したように、染五郎は歌舞伎の舞台にあげた乱歩をイメージした上で、歌舞伎としての魅力をよくひき出し得るものとして乱歩作品を捉えているのだ。それを『人間豹』に即して具体的にあげるとすれば、やはり同じ座談会での染五郎の発言が興味ぶかい。

染五郎 歌舞伎に書き換えることで逆に魅力を發揮で

きる、そういう手法が歌舞伎にはたくさんある、その意味では歌舞伎に合っているんじゃないかなと思つていました。乱歩の作品は数々舞台化、映画化、テレビ化されていますが、『人間豹』自体で言えば、劇中劇であったり、気球に乗って空を飛んでいたり、変装をして実は……があつたり、捕物があつたりと、手法としては歌舞伎のほうで、さらに魅力を引き出せる作品ではないかと思うんです。

自信に満ちた右の発言からは、上演に先だつ舞台の成功が確信されているようです。やはりポイントは歌舞伎として「魅せる」のにふさわしい作品として『人間豹』が選ばれていたということに尽きる。明智小五郎という乱歩作品におけるスターが登場するものの、『人間豹』が必ずしも今日ひろく知られた作品でないことを考えあわせるならば、そこには染五郎の「乱歩を歌舞伎にする」ことへの意欲と目利きぶりがうかがわれる。

舞台の評判ということになれば、『江戸宵闇妖鉤爪』公演中にはやくも「乱歩歌舞伎」第二弾のニュースが各紙で報じられるほどの好評を博しているという。本庄雅之「幸四郎&染五郎『乱歩歌舞伎』大盛況で来年10月第2弾」(『中日スポーツ』二〇〇八・一一・一九)では、舞台が好

評となった原因まで含めて、次のように紹介されている。

松本幸四郎（66）が明智小五郎にふんした乱歩歌舞伎「江戸宵闇妖鉤爪（えどのやみあやしのかぎづめ）」（東京・国立劇場）が大盛況で、来年にも第2弾を上演することが18日までに決まった。意欲的な新作が観客の支持を得ての盛り上がり。幸四郎がかねて口にしてきた「演劇としての歌舞伎」が実現したかっこうだ。

〔略〕

市川染五郎（35）が2役早変わりで人間豹にふんして宙乗りを見せるなど、わかりやすく変化に富んだ内容。ケレン味にたよらず、原作を生かしながら歌舞伎の様式美を取り入れた仕上がりが客足につながった。同劇場によると先週末の15、16日には満員御礼となり、平日も尻上がりに当日券が伸びている。「普段歌舞伎を見慣れている方とは明らかに違う層の方が多い」と観客開拓にもつながった。

興行としても成功を収めつつある『江戸宵闇妖鉤爪』だが、特に後半の記事を読めば、染五郎の思惑がみごとの中したことがわかる。紹介の後、記事は次のように続いている。

反響を踏まえ劇場と松竹側が、来年10月の幸四郎・

染五郎共演の新作舞台を早々決定。国立劇場で、再び乱歩作品になるのか今後煮詰めるが、今回の企画発案者の染五郎は、「（人間豹が）また会おうというセリフがあるので、ボクとしては人間豹の『その後』ができれば」と意欲の弁。26日の千秋楽まで、「乱歩の世界をすべて出し切るつもり」と力強く話した。

では、またたくまにこうした世評を受けるにいたった『江戸宵闇妖鉤爪』とは、どのような舞台作品だったのだろうか？ ここでは、ひとまず江戸川乱歩『人間豹』の小説としての特徴をみきわめておくことにしよう。その上で『小説から歌舞伎へ』という変貌を追いながら、脚色・演出を含め、歌舞伎になった乱歩がどのように上演されたのか、それは世評にふさわしい舞台成果をあげていたのか、いくつかのポイントから検討していきたい。

2

江戸川乱歩『人間豹』は、大日本雄弁会講談社の雑誌『講談倶楽部』（一九三四・一〜一九三五・五／休載を含む）に連載された作品である。同じ『講談倶楽部』に連載された『蜘蛛男』（一九二九・八〜一九三〇・六）に端を発する、通俗長篇とも娯楽活劇長篇とも呼ばれる作風に含まれ

る『人間豹』は、乱歩本人の満足はともかく、発表当時、幅広い読者（層）に受け入れられた。正確にいえば、『乱歩の新作』は発表以前から待望されていたのだ。『人間豹』の連載開始に先だつて、一読者からの投書が「読者談話室」〔講談倶楽部〕一九三三・一一）に掲載される。編集部の応答とあわせて以下に引いておこう。

◇拝啓、残暑まだく厳しい折柄、御社内に御活躍の記者皆様にはさぞかし御大変の事と存じ上げます。十月号の『評判花形大写真帖』は御期待申し上げた通りの素晴らしいもので驚きました。恒岡名探偵の大捕物は小説以上の興味をもつて毎月拝読致して居りますが、江戸川乱歩先生の大探偵小説を早くお願ひ致します。

（長崎市鍛冶屋町 吉田寅七）

○記者、江戸川先生は大傑作を近々本誌に発表して下さい。その事になつて居ります。

その二ヶ月後、『乱歩の新作』であるところの『人間豹』連載が開始されるが、その号には次に引く「江戸川乱歩先生愈、出馬」〔講談倶楽部〕一九三四・一）が掲げられる。

本誌に曾て『蜘蛛男』『魔術師』『恐怖王』と、稀代の大探偵小説を相次いで発表して読書界を熱狂乱舞させた探偵小説壇の大巨星が、二年の沈黙を破つてこ

に又復素晴しい大傑作を執筆されることになりました。題して『人間豹』、題名からしてすでに奇々怪々を極めてゐるではありませんか。『この『人間豹』の物語は、自分の小説の中で一番面白く書け一番気に入つてゐる材料だ』と、作者も云つてをられるだけあつて、第一回の抑々から実に無気味で実に面白く、さすがに世界的大作家の大手腕と驚嘆する許りであります。／＼次回からがいよいよこの大探偵小説の本筋で妖艶怪奇の大場面が次から次へと展開され、稀代の悪魔王、明敏活断の名探偵との、血みどろな智慧くらべと腕くらべが映画面の如く華かに目まぐるしく誌上に活写されてゆきます。あなたの御知己の中で未だ本篇を読まぬ方がありましたら、この世界的大探偵小説だけは是非共第一回から読まれる様おすすめて下さい。乱歩先生も非常な意気込みで筆を執つてをられるのですから。

まず、ストーリーを確認しておくならば、会社員の神谷芳雄が行きつけのカフェーで、恩田（人間豹）に出会うところからはじまる。恩田は、神谷のなじみである弘子を横取りし、指環を贈りさえる。この登場シーンで恩田は、次のように描写されている。

神谷はその男が歩いている間に、風采ふうさいや容貌を見て

とることが出来たが、彼は真黒な背広を着た、ひどく瘦型の、足の長い男で、その顔はトルコ人みたいになど、ス黒く、頬が痩せて鼻が高く、びつくりする程大きな、何かの動物を聯想させる様な両目が、普通の人よりは、ずっと鼻柱に近く狭まって、ギラギラと光っていた。年配は三十歳程に見えた。

恩田に見初められた弘子は、後日、誘拐されてしまう。ことに気づいた神谷は、以前尾行した記憶をもとに恩田の住処を探し当てるものの、恩田の父の罫にはまり、弘子は恩田になぶり殺されてしまう。かろうじて逃げ延びた神谷は、恩田のアジトを警察に通報するが、そのことで恩田父子の恨みを買ってしまう。この出来事から一年後、神谷は「レヴユウ団の女王」江川蘭子を恋人にしている。というのも、江川蘭子は「死んだ弘子の写真ではないかと感じた程」・「嘗ての恋人と瓜二つ」であったのだから。その江川蘭子も、変装をはじめとした策を弄す人間豹・恩田によって、絶体絶命の危機に陥れられてしまう。

そうした局面で神谷は、自身で江川蘭子を守ることに限界を感じ、次のような考えを抱く。

警察力が頼むに足らぬとすれば、もう外に手段はない。一縷の望みは有力な民間探偵の力を借りる事であっ

た。私立探偵と云えば、忽ち思い浮ぶのは明智小五郎だ。彼なれば、警察が手古摺った難事件を易々と解決したという話を幾つも聞いている。殊に人間豹の様な怪犯人には、明智こそ似つかわしいのではあるまいか。

こうして、明智小五郎が事件解決に乗り出して来るのだが、そのことを知った恩田は「全裸体の江川蘭子の死骸」を神谷宅へ送り届けてくる。ここから「人間豹対明智小五郎」という対決の構図がせり出して来るのだが、第三の標的は明智夫人の文代である。以後、恩田父子と、文代に助手の小林を加えた明智との知略をめぐる闘いが繰り広げられていく。クライマックスは、大サーカス・乙曲馬団の舞台上での「二匹の猛獣の睨み合い」、その実、囚われの文代と人間豹との、「大群衆」の前での「悪魔のリンチ」である。明智は危機一髪のところまで文代を救うものの、恩田父子を捉えることはできなかった。恩田の父親は自殺し、息子の方はサーカスのテントの屋根から風船に乗って舞い上がっていった……

このような小説『人間豹』の特徴として、以下の三点をあげておきたい。第一に、ストーリー進行のテンポのよさ、スピーディーな展開があげられる。そこには、車や電話といったテクノロジも大きく関わっているが、お互いの裏

をかきあう人間豹・明智小五郎両者の知恵比べ——相手の企みに少し遅れて気づくエピソードの連鎖もそうした印象を強めている。第二に、ストーリーの要となる人間豹に關して、出生の秘密や欲望の由来、殺害の目的、さらには結末での逃亡後の行方まで、小説をいくら読んでも明らかにかにされない多くの謎（空白）が仕掛けられている。これを『人間豹』の難点とみるむきもあるが、不可解さそれ自体が作品世界の不気味さを増しているのは疑いない。また、「D坂の殺人事件」で登場した明智小五郎が、謎を解くこと（だけ）を重視し、犯人逮捕を第二義としていたように、ここに探偵小説の現代性をみることもできるだろう。

最後に第三として、今日ならば『劇場型犯罪』とでも称すべき、みられることを意識した人間豹の言動（犯罪）があげられる。逆にいえば、この小説には、人間豹（とその言動）をまなざす群衆・メディアがよく描かれているのだ。

それは、江川蘭子が殺された際の次の一節に明らかだろう。

棺桶配達事件は、被害者が帝都興行界の花形江川蘭子であった上に、殺人者が世人を戦慄せしめていた怪物人間豹と分っているのです、その騒ぎは一通りでなかつた。その日の夕刊は、あらゆる激情的な形容詞を濫費して、殆ど第二面全頁をこの報道で埋めた。被害者

蘭子の写真、明智小五郎の写真などが、見世物の様にかデカデカと掲載せられた。

『人間豹』におけるこうした特徴は、乱歩の作家性ばかりでなく、一九三〇年代に書かれ、発表された小説として、同時代の空気（条件）を多く吸いこむことで形成されている。ならば、小説から歌舞伎へとそのスタイルをかえたことにくわえ、時代背景を江戸時代に移した『江戸宵闇妖術爪』は、そのことによってどのような変貌を遂げたのだろうか。

3

小説『人間豹』を、歌舞伎の脚本へと書き換えることを依頼された岩豪友樹子は、その際の戸惑いと解決の道筋を、

「乱歩が歌舞伎になる」〔前掲〕で次のように語っている。

岩豪 〔略〕最初は本当に手探り状態で書いていて、具体的にどういう事件を起こしていったらいいのかとか、もちろん原作もエッセンスとしてあるのですが、江戸時代の要素とか、時代背景とかそういうものを入れたりしていくうちに、私は江戸のあの時代に乱歩を持つてきても全然違和感がない、という風にしたほうがいいのではないかと考えました。幕末の混乱期に人

間豹みたいな男がいて、明智小五郎と絡むということ
が、不自然にならないように作ろうと思っただけです。

それで時代背景の方が主だった気がします。そうやって
第一稿を作りました。それに対して、明智小五郎と
人間豹の恩田との二人の対決を主にするべきだと教え
ていただいて、そうか、そうなんだと、そちらのほう
が正解だったなと考えて書き直しました。

つまり、「時代背景」をベースに登場人物やストーリー
を書き換える方向性をもった第一稿を経て、サブタイトル
にも明示されたように、「人間豹対明智小五郎」を前面に
おしだした上演版へと、脚本を練り上げていく過程で変貌
を遂げてきたというのだ。こうした脚本は、俳優陣にも腑
に落ちるものとなったようで、明智小五郎を演じた松本幸
四郎は「江戸の明智小五郎」（前掲公演パンフレット）に、
次のようなコメントを寄せている。

小説の明智小五郎は、戦前の東京で活躍するモダン
な私立探偵で、乱歩の作品世界の一面を体現していま
す。それを江戸の人間にどう置き換えるかという、難
しい課題を、脚本の岩塚さんが「隠密廻り同心」とい
う設定にして解決してくださいました。それによって
昭和のインテリジェンスが江戸の小五郎の粋なイメー

ジと重なり、七、八割方役作りが出来た気がしていま
す。

もちろん、そのことによって近代（小説）における探偵
という、謎解きに主眼をおいた明智の役割は、犯人逮捕と
いう一点にしばられていく。このことと連動して、人間豹・
恩田もまた、小説『人間豹』での謎の「獣類」から、時代
の不満を体現した存在へとその意味をかえていく。そのこ
とは、明智の次のセリフによって集約的に説明されている。

明智 奴はこの江戸の闇の中に産み落とされた化物だ。

黒船来航を機に始まった動乱の中、貧乏が勤王の志
士を生み、新撰組を生んだ。毒をもって毒を制すと
ばかり、桜田門外、坂下門外と相次いだ大老・老中
襲撃事件。薩長の不穏な動き、はたまた天誅と称す
る尊攘派の人斬り横行。幕府倒壊の足音はすぐそこ
まで迫ってきている。戦火の中を逃げ惑い、権力に
押しつぶされ踏みにじられてきた民衆は、世直しを
求めて立ち上がり、今、燃えさかる火のように広がっ
ているのが一揆、打ちこわしだ。その虫けらの如く
踏みにじられ虐げられてきた民衆の恨みつらみを一
身に背負って、江戸の暗闇の狭間に生まれてきたの
が恩田乱歩。だが、この江戸の闇をこのままに捨て

おくわけにやいかねえんだ。この暗闇に光を当て、悪を退治し義を貫く、それがやがて国を守り民を救うことになるのだ。どんな理由があろうともけして奴を許さねえ。たとえ時代がこの先どこへ向かおうとも、如何なる闇も許すわけにやいかねえ。恩田はそれを知りながら俺に闘いを挑んできやがったんだ。

そればかりではない、ストーリーの大筋においては小説『人間豹』をなぞるように展開されていく『江戸宵闇妖鉤爪』だが、悪の人間豹対善の明智小五郎[※]という構図の反復を経るうちに、いつしかそれは「勸善懲悪」の枠組みへと収まっていく。明智が恩田を追いつめたクライマックスの対決シーンでは、次のような台詞がやりとりされているのだ。

明智（静かに）……恩田、お前は何を恐れている？

恩田 なに、俺が恐れるだと？

明智 今のお前はおのれの中に人間の心を認めるのを恐れているからそう言うのだ。恐れているからこそ、狂った如く天に抗い、大地に血を流さしめずにはおかれぬのだ。

恩田（自身も気づかなかった心を使い当てられた如く たじろぎ）黙れ。胸が悪くなるわ。いいか、俺は人

間の心なんぞ認めねえ。そんなもの俺にや、はなから必要ねえんだ。いくら時代が変わろうと人間はてめえが一番かわいいのだ。己の欲のためにや親でも子でも殺す腐り果てた蛆虫ども、それが人間だ。俺は俺の思うがままに生きる。この世に俺を裁く掟はねえんだ。

だから、小説『人間豹』には確かにあった、謎に包まれているがゆえの不気味さや、近代都市を舞台としていたがゆえの時代の不安などは、『江戸宵闇妖鉤爪』ではぬぐいさられ、かわりに「勸善懲悪」を軸としたわかりやすい人物配置・ストーリーが全篇をおおっている¹。ただし、このことは表現形態と時代背景とを異にしたがゆえの差異であり、それ以上でもそれ以下でもなく、ましてやそこから優劣を云々するのはナンセンスであろう。

*

今度は逆に、小説『人間豹』になく、『江戸宵闇妖鉤爪』に仕掛けられた「歌舞伎らしさ」を検証していこう。それに先だち、演劇評論家・渡辺保による「渡辺保の歌舞伎劇評 惜しい新作」(<http://homepage1.nifty.com/famotu/review/2008.11-3.htm>)を参照してみよう。

江戸川乱歩の小説を歌舞伎でという企画は、見る前

はどうなるかと思つたが、見ると新鮮かつ奇抜で面白い。岩豪友樹子脚色の「江戸宵闇妖鉤爪（えどのやみややしのかぎづめ）」である。／昭和初期の風俗を江戸幕末へ移しかえた趣向も、染五郎の人間豹恩田乱学の宙乗りもうまくいっているし、舞台転換があざやかでテンポもあり、第一幕、第二幕ともに一時間という短さも丁度よく、恰好の世話物、新歌舞伎というところであつた。／しかし残念なことに致命的な欠陥が四つあつて、そこが問題でもあり、芝居としてのコクを失つて面白くない。惜しい。

全体としては期待以上の出来、ただし不満が残らないわけではないという評価である。

ここでは、「市川染五郎 大風にて宙乗り相勤め申し候」と銘打たれた本作の演出について、「乱歩が歌舞伎になる」(前掲)での幸四郎の次の発言からみていくことにしよう。

幸四郎 そうですね、僕は歌舞伎以外の色々な芝居にも挑戦していますけれども、歌舞伎を作る場合には、すべてが歌舞伎でありたいんですね。それは歌舞伎のような台詞回しでいくとか、歌舞伎っぽい動きをするとかいうことじゃない。歌舞伎に携わっているものが作る歌舞伎。音楽も、和楽器の太鼓や三味線であると

か。今回も、新内、長唄、義大夫、それに和太鼓の響き等、色々な日本古来の音楽で統一しました。もちろん台詞、扮装、背景、すべてひっくり返るめて歌舞伎としての良さ、面白さになっていると思つています。

『江戸宵闇妖鉤爪』において、ヴィジュアル面でクロージアアップされるのは、何といつても染五郎演じる人間豹である。黒装束に身を包み、禍々しい爪をつけ、真つ赤な舌をだしては、ワイヤーに吊られて軽やかに舞台を飛び回る。その登場時には、歌舞伎とは思えないほどに扇情的で派手な太鼓音楽がかかるが、これも右に幸四郎がいうように和楽器であることによつて、舞台としてはうまく調和をみせていた。廻り舞台やらせりあがりをつるに活かした舞台展開のはやさとも相俟つて、スピード感のある斬新な舞台が印象的で、立ち回りや音楽なども含め、いのうえひでのりによる、いのうえ歌舞伎を彷彿とさせながらも、しっかりと歌舞伎として地に足を付けたものに仕上がつていたといえるだろう。

興行の目玉でもある、染五郎の宙乗りも見応え充分だつた。明智に追いつめられた人間豹・恩田は大風に乗せられて花道から登場し、そのまま高く舞い上がつていく。捕まへようと明智が発砲すると風は落下しはじめるが、恩田は

体勢を崩しながらも番傘をひらき、軽やかに追っ手をか
わしながら二階席へとたつぷり時間をかけて飛び去ってい
く――。

この人間豹・恩田乱学を演じた染五郎は、同時に恩田に
二度も恋人を奪われる神谷芳之助も演じている。染五郎は
対照的な二役を演じたことになるわけだが、それは明智が
部下と交わす次の台詞によって示される通り、『江戸宵闇
妖鉤爪』にとつての必然でもあった。

新八 恩田は神谷に恨みでも。

明智 いや、あいつはこうと見込んだ女は必ずものにす
る奴だ。

恒吉 そんな身勝手を通るわけが……。

新八 だが、もし恩田が神谷のように色男で、神谷が恩
田のような化物だったら。

明智 何。

新八 神谷は恩田と同じことをしたかもしれないねえ。

明智 神谷と恩田は、表と裏……光と影というわけか。

こうした設定・配役は、歌舞伎に課された現実的な条件
を逆手にとつて活かしたものと見えるだろう。本作では他
にも市川春猿が、商家の娘お甲・女役者お蘭・明智の女房
お文の三役を演じているが、この三人は偶然にも顔が似て

いることによつて人間豹・恩田の標的にされるのだから、
これもまた俳優が実際に演じる歌舞伎の強みを生かした配
役である。

*

このようにみてきた上で、改めて確認しておくならば、
『江戸宵闇妖鉤爪』はやはり、歌舞伎としての乱歩とい
う観点から評すべき作品に違いない。江戸川乱歩『人間豹』
には、作品としての善し悪し以前に、小説ならではの内容
があり書き方があった。そのいくつかは、脚色・歌舞伎化
といった過程でうしなわれることになったが、そのことを
『江戸宵闇妖鉤爪』評価に直結させる必要はない。『人間豹』
のエッセンスは、新作歌舞伎という新たな表現形態へとト
レースされ、そのことによつて新たに生まれた魅力も少な
くない。生身の人間が「いま・ここ」で歌舞伎の様式に即
して上演するという条件の中、五感を刺激する趣向を凝ら
した演出によつて、小説『人間豹』は歌舞伎『江戸宵闇妖
鉤爪』へと、文字通り生まれ変わったのだ。この歌舞伎作
品によつて、逆に小説『人間豹』の特質が浮き彫りにされ
たことを思えば、時代と表現形態を異にしながら、お互い
がお互いを映し出す鏡のような関係として、小説『人間豹』
と歌舞伎『江戸宵闇妖鉤爪』とは存在している。

【註】

1 登場人物に関していえば、『人間豹』における恩田の父親は、『江戸宵闇妖鉤爪』では（人間豹の母親らしい）百御前という母親に変更され、しかも人間豹誕生の秘密は、捨てた子供を百御前が見世物芸のためにつくりかえたためとされている。これに関して、脚本には「乱歩の『孤島の鬼』で犯人の老人は子供を誘拐して熊娘や一寸法師などの奇形児を作り出していた。」との付記があり、乱歩作品にヒントを得たものようである。

2 ここで渡辺保が指摘する欠陥とは、「世話物らしいリアリティがない」・「せりふが説明的で人間の言葉になっていない」・「人間豹の存在の意味が第一幕と第二幕で微妙にぶれている」・「人間豹に凄味がない」という四点である。

※本文は、『黒蜥蜴（江戸川乱歩全集 第9巻）』（光文社文庫、二〇〇三）・岩豪友樹子脚色『平成二十年十一月国立劇場歌舞伎公演上演台本 江戸宵闇妖鉤爪―明智小五郎と人間豹―』（国立劇場、二〇〇八）に拠った。また、『講談倶楽部』からの引用に際してはルビを省略した。